

ある発達障害児の回復過程と心理療法

上地雄一郎・熊谷雅美*

1. 問題と目的

本論文の目的は、心理的要因のために発達障害を呈したと思われる1女児の事例の分析を通して、障害発生の原因・背景となった親子関係の問題、本児の回復と発達を促進したもの、本児が心理療法の過程で示した言動の発達の意味などについて、精神分析的発達理論に基づいて考察し、心理療法における注意点を示唆することである。分析の対象となる資料は、遊戯療法の過程で本児が示した言動や遊び、母親面接で聞いた本児の家庭での言動である。

本児は様々な面に発達の遅滞や歪みを呈し、そのいくつかは自閉症と共通する特徴であった。しかし、心理療法の結果、就学時には何とか普通学級への通学が可能にまで回復した。黒丸(1983)¹⁾は、自閉症を象徴機能の障害と考え、母子間の対象関係が成立する生後3ヶ月から1年6ヶ月までの母親の養育態度の不備によっても自閉症様の障害をもたらされる例を指摘している。品川(1983)²⁾は、愛着の形成がうまくできなかった子どもが自閉症を疑われるような対人関係の障害を示すことがあると述べ、森(1983)³⁾も「心因的色彩の強い自閉症」を指摘している。本児の場合も、胎・周生期に何らかの脳機能障害が発生した可能性をまったく否定することはできないが、心理的要因によるところが大きいと思われるので、そこに重点をおいて考察したい。なお、面接者はThと略述する。

2. 事例紹介

年度は、初発来談の年を*1年、以後*2年、*3年などと記述する。#1、#2などは、面接の回数を表す。

<症児>

Mちゃん(女児)。年齢は、来談時(*1年11月)に3才11ヶ月。

<問題>

- ①母親に愛着を示さず、「お母さん」という呼びかけをしない。
- ②言葉の問題:「シッコ」「チョウダイ」「オチタ」「イタイ」「トッテ」などの単語しか話せない。発語はオー

- ム返しが多い。教師から言われたことを繰り返したり、絵本を一定の調子で何度も母親に読ませる。
- ③排泄のコントロールができず、頻繁に夜尿がある。
- ④他児と接触できない。すぐ一人になり意味不明の独り言を言いながら遊ぶ。
- ⑤偏食がひどい。野菜をまったく食べない。

<臨床像>

表情に生気がない。歌を口ずさむように意味不明の独り言を繰り返す。筆者が「こんにちわ」と言うと、すかさず同じ言葉を返してくるが、感情が伴っておらず機械が応答したような印象を受ける。筆者が視線を合わせようとすると、それを意識したのか顔を机の下に隠す。こちらが先走りして言葉をかけると、「アー」と言って耳をふさぐ。

<家族と問題>

中国地方のA市在住。父、母、本児、妹の4人家族。両親は、B市の同じホテルに勤めていたことから恋愛して結婚。父方祖母と母方祖母が健在。

父親:来談時29才。同胞は4人で、末っ子。西洋料理の調理師で、ホテルに勤務。穏やかで優しく育児には協力的。しかし、「父親を早く亡くしたせい、子どもへの関わり方が分からなかった」と語る。Mに嫌われるのを恐れて叱れない。

母親:来談時27才。弟が一人いる。専業主婦。神経質なところがあり、きちんとしていないと気がすまない。怒ると非常にきつくなり、周囲の人から「こわい」と言われる。子どもの全面的な依存、弱い面、退行したい気持ちなどを受け入れるのが苦手で、子どもに早い自立を期待する傾向がある。面接での話し方は話題が転々と移りやすい。

妹Y:来談時2才。発達的には大きな問題はなく、人なつこい性格だが、周囲の関心を自分に引きつけようとする傾向が強い。

<Mの生育歴・問題歴>

B市で生まれた。望んでいた子であった。胎生期:母親が腎盂炎で1週間入院。周生期:満期出産。体重2500グラム。黄疸がひどく、3日間放射線治療。定額:2.5

*元広島大学教育学部研究生

ケ月。初語（マンマ、ブーブー）：7～8ケ月。歩行：1才2ケ月。生後8ケ月まで変わった印象はなく、祖母にもよくなっていた。生後8ケ月、父親が兄とレストランを経営することになり、B市を離れてA市に転居し、兄夫婦の家に同居した。しかし、Mの両親と兄夫婦の仲はうまくいかなかった。母親は兄夫婦に気を遣い、食事でも自由に作れなかった。兄嫁が妊娠していたので、Mを泣かせまいとピリピリし、Mの自由を制限した。自分の家なら怒らないことでも怒った。また、母親は、転居の疲れで寝込んだり、Yを妊娠して流産しそうになったりしたため、Mの相手が十分でできなかった。転居直後から、Mは夜泣きが多くなり、夜は母親の腹の上に仰向けになって寝た（1才4ケ月まで）。母親と視線を合わさなくなり、今まで話していた言葉も話さなくなった。何かに夢中だと呼んでも応じなかった。イナイイナイパーなどの芸をする行動も見られなかった。Mが1才9ケ月の時、Yが生まれた。Mが2才過ぎから排泄の躰が行われたが、うまくいかなかった。母親は兄嫁の勧めで、2回言ってだめだと、体罰を用いた。Mには睡眠障害（夜中に目を覚ます。朝早く起きる）もあり、夜中に起きてトイレに紙を大量に詰め込み水を溢れさせたことが3回あった。

< 処遇・相談歴 >

妹Yの検診の際、A市児童相談センターの「障害児教室」を紹介され、半年ほど通う。その後、Mが3才4ケ月の時に児童相談センター内の「精神薄弱児施設H園」に通園し始めた。その同じ年の12月、知人の紹介で、C大学・心理相談室に来談した。

< 処遇内容・経過 >

週1回の母子並行面接。Mの遊戯療法を熊谷が、母親面接を上地が担当した。場所：*1年から*4年6月までC大学・心理相談室。面接者の所属が変わったため、*4年6月から*5年2月の終結までは、A市青少年指導センター。

< 心理診断と処遇方針 >

本児の行動や面接者への反応を見ると、ある程度自他の表象（注1）の分化が進んでおり、他者の認識がなされていると思われる。生育歴や母子関係から問題を心理力動的に理解することが可能なので、主に心理的要因による発達障害（自閉傾向）と判断した。処遇目標は、本児に対する遊戯療法および母親指導によって、本時の母親および自己に対する肯定的表象を回復させ、母親への愛着を取り戻させることであった。注意点としては、本児が母親の侵入的態度に強い拒否感を持っているようなので、遊戯療法では非侵入的・受容的態度を維持するこ

とにした。母親面接では、指示的・教育的アプローチを採用した。

3. 面接経過

【第1期（インテーク〔2回〕、#1；*1年12月）：自閉的防衛】

<遊戯療法> Thが「いろいろおもちゃあるね。どれで遊ぼうか」と言うと、Mは「オハヨー」と答える。Thに背を向け、意味不明の歌やCMをくちずさみながらおもちゃを棚からおろしたり床にひっくり返したりする。箱庭の砂を床にばらまく。Thが叱らずに見ているとさらに激しく砂をばらまく。それが終わると小さな人形を取り出し、「ネンネ、オキタ、オハヨー」と言いながら寝かせたり起こしたりする。インテークでは、妹のYがついてきており、Thの関心を引こうとしきりに話しかけてきて、家庭の縮図のようであった。終了時間が来ると、Mは遊戯室のおもちゃを黙って持って帰ろうとする。Thが制止すると黙って戻って帰って行った。インテークの2回目には遊戯室で排便を、#1では排尿を行った。Thが体を清潔にしようとするが、Mは拒否し下半身裸で遊んだ。

【第2期（#2～6；*2年1～3月；4才）：自閉的防衛の崩れ】

<遊戯療法> 歌やCMが減少し、状況に合った発語が増えた。Thに対する要求は、「シャテ、シャテ（「して？」）」とか「コッチコウ、コッチコウ（「こっちきて？」）」という言葉で表現した。同じ言葉を何度も繰り返すのが特徴的であった。遊びの内容は、人形を砂の中に埋めて、また出す；家族を表すと思われる人形を使って食事の場面を演じるなどであった。その際、妹と思われる人形をのけ者にしたりおもちゃのエレベーターに閉じこめたりしたのは印象的であった。#6では、母親人形をもって床に丸くなってうずくまり、しんみり「オカアサン」とつぶやいた。排泄は毎回のように遊戯室で漏らし、Thが後始末しようとするが、Mは世話を拒否した。終了時には、やはりおもちゃを持って帰ろうとした。

<母親面接；第1・2期> 夜尿を叱ることや体罰はやめてもらうようにした。母親は、Mが反応してくれないので、落胆したりいらだちたりしていた。そのためMから反応を求めすぎて侵入的になっていると思われたので、「Mからのほたらきかけを待ちそれに応じて動くように」と助言した。家庭でMが「カアサン」という呼びかけをし始めた。また、母親の膝ののってきたりするようになったが、妹のYが来ると母親を奪われてしまう。Mの表情に生気が出てきた。

【第3期（#7～11；*2年3，4月；4才）：遊びの中での退行】

<遊戯療法> 語彙数は増えないが発語は活発になった。#8からミルク飲み人形に授乳する遊びが現れた。「ゴクゴクゴク、オイシイ？」などと話しかけ、「マンマンマン」といった喃語様の言葉を言いながら飲ませた。その後、モンチッチなど他の人形にも授乳した。この時のMの表情は非常に満足気であった。その他、「シャンプーする」と言って人形達を世話したりした。機関銃でThやM自身を撃つような遊びも見られたが、攻撃の方向は漠然としていた。#7で、Mが排便したようなので、Thが「うんこ？」「パンツ脱ごうか」などと聞くと、Mは「ナイ」の一点張りであった。しかし、しばらくして自らパンツを脱ぎ、Thが臀部を清潔にしようとするのを受け入れた。

<母親面接> 母親にまどわりつくようになり、妹のYが来ても逃げない。夜は母親にしがみついで寝る。家族ひとりひとりの名前を呼び、「はい」という応答を求める。また家族にM自身の名前を呼ぶことを求める。家族をたたいたり髪の毛を引っ張ったりして喜ぶ。H園でも他児と同様のいたずらをする。絵本を見て、「コレナニ、オシエテ」「トウサン、シゴトイッタ」（3語文）程度の表現ができるようになった。屋内では塗り絵に熱中し、母親と戸外でよく遊ぶ。近所の人にも反応するようになった。

【第4期（#12～19；*2年4～7月；4才）：母親への回帰】

<遊戯療法> 遊びは転々と変わりまとまりがない。内容は、第3期と同じような授乳の遊び、人形を入浴させる遊び、攻撃的な遊びなどであった。この時期の特徴は、遊びの途中でふと思い出したように母親のいる面接室の方へ行くことであった。#12～14では、面接開始後20分くらいで、「マタライシュウ、バイバイ」と言って遊戯室のおもちゃを持って母親面接室に行ってしまった。#15では、Mが泥水を流しに捨てようとするのでThが制止すると、Mは「イヤ、イヤーン」と泣き叫んで、室外に出て行った。Thが追いかけると、MはThの姿が見えなくなる所まで逃げて立ち止まり、Thの姿が見えるとまた逃げるということを繰り返した。そして、結局は遊戯室に戻り、Thの指示通りの場所に泥水を捨て、Thの膝ののってきた。ThはMが感情をより直接的にぶつけてきたように感じ、距離が近くなった感じがした。

#16～19では、やはり母親面接室に行くが、すぐには入室せず、まずドアの所で「カアサン、カアサン」と叫び、母親が近づこうとすると、M自身がドアを閉めてし

まう。母親が遠ざかろうとすると慌てて追いかける。#18には、遊戯室に入ってきた母親に砂をかけたたり刀でたたいたりした。Mが母親に対して強いアンビヴァレンスを抱いているように思われた。

<母親面接> 戸外では母親の近くでよく遊ぶ。時々、トイレに一人で行くこともできるようになった。B市の実家に帰った時には「シッコ」「ウンコ」などと排泄を告げた。夜は歌や独り言をつぶやきながら眠る。ムーミンの絵本、祖母が書いてくれた絵、母親の枕など移行対象（Winnicott,1971）⁴⁾的なものを布団のそばに置きたがる。一時、父親にべったりつきまとい、絵を書いてもらいたがる時期があった。戸外では10分くらい他児の中に入って遊ぶこともある。近所の主婦に「オバチャン、ダッコシテ」と言った。おもちゃのピストルをこわがるようになった。父親がMに対して腫れ物に触るような感じではなくなり、叱れるようになった。

【第5期（#20～28；*2年7～10月；4才）：面接者への接近】

<遊戯療法> 必要なおもちゃだけを取り出して遊び、遊びにもまとまりが出てきた。内容は、家族を表す人形、車、木、動物などをならべるような遊びであった。排泄については、#20にThが「うんこかな？」と聞くと「モウシタ」と初めて告げた。またThが排泄の後始末をしようとする素直に従った。この時期の特徴はThへの態度が変化し始めたことである。Thの顔をチラチラと窺うようになり、#22・23では一緒に粘土をこねて遊び、#24にはMの方からThの膝ののってきた。#25では、自らThにだっこをせがみ靴下をもとどおりに直してほしいと要求した。またThを機関銃で撃つような攻撃的遊びでは、攻撃の方向性がはっきりしてきた。Thへの愛着が増すと、今度は退室時に母親とThの間で引き裂かれる現象が現れた。母親が迎えに来ると帰るのを嫌がり、母親がひとりでも帰ろうとすると泣き叫んで追いかけるといった行動を交互に繰り返した。

<母親面接> 実家に帰省した時には尿意をよく告げたが、A市に戻ると以前に逆戻りした。遊びでは、近所の子と泥んこ遊びをよくし、一つの遊びにかなり集中している。腹が立つと相手をたたくようになり、母親は「悪いことをして困る」と述べた。その一方、妹が危険な所にいると心配して叫ぶ。偏食が少し減った。母親はMを精神薄弱児施設から普通の保育園か幼稚園に移したいと考え始めた。

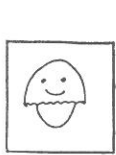
【第6期（#29～41；*2年10月～*3年3月；4～5才）：良い対象象の定着と攻撃性への対処】

<遊戯療法> Mの話し方に感情がこもるようになった。

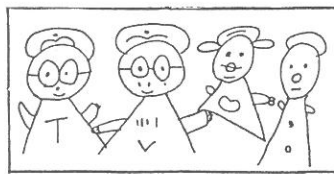
「オシエテ」と言ってThに動物の名前を聞く。かたつむり、蛙、亀、蛇など気味の悪い動物に関心を示し、Thに取ってもらいたがるが、「イヤ、コワイ」と言って触ることはできない。しかし、#34ではすべてに触る。そして砂で自分の好物のホットケーキを作り、これらの動物に食べさせた。この遊びの後は必ずミルク飲み人形に授乳した。気味の悪い動物にはMが恐れているもの（Mの心の中の怒りや攻撃性）が投影されており、これに近づき手なずける作業が行われているのではないかと思われた。

#33には、初めて黒板に絵らしきものを描いた（図1）。#34～36では、「オネエちゃん」と言ってThを見ながら図2のような絵を描いた。また、絵の部分を「オハナ、オクチ、カミノケ、メガネ」などと説明した。絵が出来上がると、自分で拍手しながら「ジョウズカッタネ、カシコイネ」と言うので、Thも一緒に賞賛した。#37には、「アシ、チョウダイ、ソックス、ハクソヨ」などの表現で、書く部分を指示してThにも書かせた（図3）。#38では男の子と女の子が手をつないだ絵を書いた。Mの対象関係が豊かになり、性別についての意識も出現してきたことがうかがえた。この時期から退室時には、MとThが「マタライシュウネ」という言葉を交互にかけあいながら別れることができるようになった。Mの心に遊戯療法とThの表象が良い対象として定着し、「マタライシュウネ」という言葉がそれを象徴するものになったと思われた。

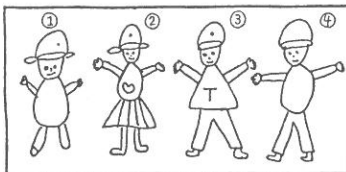
<母親面接> 母親に対してアンビヴァレントで、父親の方に接近する時期があった。運動会の親子競技でも親をいやがり教師と一緒にだと喜んで参加した。排尿を母親によく告げるようになり、失敗が減った。「イヤ」「ダメ」



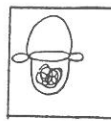
(図1 #33)



(図2 #34グッドイナフテストEQ98)



(図3 #37 ①はグッドイナフテストEQ100, ②の腕、手、スカート、足、③、④の腕、手、ズボン、足は、Thが描いた)



(図4 #45)

という言葉をよく使う。親を「バカ」などと言ってからかい、逆に機嫌を取るようなそぶりもする。台所仕事をしたり、父親にビールをつぐなど、女の子らしいこともする。父親のそばで寝るが、母親にも「コッチオイデ」と言う。原因不明のぐずり泣きがあり、母親にだっこをせがんだりする。*3年に入ると、就寝時に母親に絵本を読んでもらうのが日課となる。夜半に目が覚めても、「カアサン、イッテラッシャイ、バイバイ」などと言いながら寝てしまう。母親は、「きちんとさせたい気持ちが無くなってきた」「Mも言うことをよく聞くし、いらいらすることはない」といった変化を報告した。Mを受け入れてくれる幼稚園が見つかり、新年度から通園させることに決まった。

【第7期（#42～53；*3年3～7月；5才）：母親像と面接者像の融合】

<遊戯療法> #44までは情緒不安定で遊びはまとまりがなく、手や雑巾などを強迫的に洗うことがあった。「イコシナサイ！ナニシテンノ」などと言いながら人形をたたいたりもした。#45では図4のような崩れた顔を描き、突然Thに抱きついた。#46～52は、毎回のように漫画の『あられちゃん』の絵を出し、Thに描くように要求した。そして色を二人で塗り、出来上がった絵は家に持ち帰った。絵の後はモンテッチの人形を砂の風呂に入れ、「キレイニナッタネ」などと言いながら洗い、「イコネ、イコネ、ネンネシヨウネ」と言って寝かせ、なでたり授乳したりする。印象的だったのは、このような遊びのなかでMがThを「オカアサン」と呼んだことである。

<母親面接> 4月に幼稚園に移る予定であったのに、H園の手違いで入園が1ヶ月遅れた。母親はH園の対応にいらだった。Mは、母親の不安定さや転園の不安のためか母親にまわりついた。しかし、母親は「もし幼稚園でMがだめになっても親子で何とかはい上がる」と言えるまでになり、Mがぐずったりするのは新しい発達課題に直面しているからだということも分かるようになった。幼稚園への移行は比較的スムーズに進んだ。Mは夕方涙もなく泣いてぐずることが多かったが、近所の子ともよく遊び、簡単な模倣やお菓子を分けあって食べるなど、社会性が発展した。妹のYが退行的になり、Mの面接についてくるようになった。

【第8期（#54～67；*3年7～12月；5～6才）：現実の面接者への関心】

<遊戯療法> Thを「オカアサン」と言うことはなくなり「オネエちゃん」「オバサン」などと呼んだ。Thの膝にのってきたり、Thと目を合わせて微笑したり、Th

の眼鏡をかけてみたりするなど、Thへの直接的関わりが増えた。語彙がどんどん増え、助詞も使用し始めた。Thに絵を描かしている間にM自身は別の遊びに熱中するなど、Thの描く絵の重要性は薄れてきた。遊びの内容は、プラレールをつないで列車を走らせる、滑り台から滑り降りる、アクロバットの演技をするなどダイナミックになった。また自分でできることではThの援助を拒否した。妹のYが面接について来て遊戯室に入り込むことが2度ほどあり、Mがかんしゃくをおこしたり、二人がおもちゃの奪い合いをしたりした。Yは預けて来てもらうようにした。Mに「ここはMちゃんの部屋よ。Yちゃんを入れてごめんね」と告げると、Mは安心したように微笑した。

<母親面接> 近所の人にもよくなじみ、元気に外へ遊びに行くが、母親の存在は気になるらしく、帰宅時に母親がいないと泣く。一時、母親にまどわりついて外出しなくなった。不安がる母親に、Thは分離に伴う不安やしんどさを具体的に説明した。8月には言葉が非常に発達し、男の子の影響で汚い言葉も使うようになった。「おかあさん、Yちゃんね、Aちゃんたいたよ」などと言いつけに来たりする。電話や数への関心も出てきて、50まで数えられるようになった。Yが自分のできないことをすると泣くなど、Yの存在が気にかかるようであった。MがYとの間の境界を保てるように、Yを面接に連れてこないようにしてもらう。また、母親にYの誕生によってMが被った喪失体験を説明した。この時期はMの発達が著しく、母親の期待が過剰になっているように思えたので、Thは「過剰な期待はMの負担になる。退行的・幼児的でありたい気持ちの方も満たしてやるのが大切である」と示唆した。〔5才11ヶ月時点でMの描いた絵を発達の指標として挿入する。〕

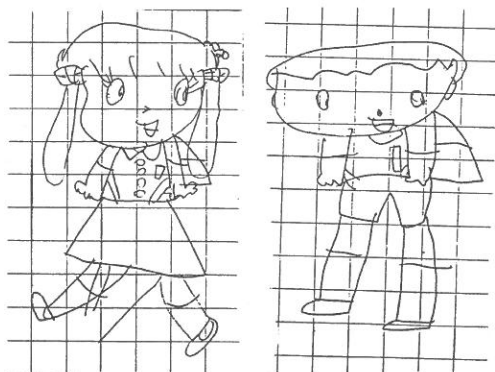


図5 5才11か月。DQ=116。

【第9期（#68～82；*3年12月～*4年5月；6才～小1）：同性としての面接者への関心と同一視】

<遊戯療法> 入・退室時には、「おじゃまします」「さよなら」などと挨拶した。Thの背中にくっついてThの横顔を見るとか、Thに『「Mちゃん』と言って』と要求しThの呼びかけに「はい」と答えながらThをじっと見つめるとか、Thに「裸、見せて」と要求するなど、Thの身体への関心が強い様子であった。遊戯室を「おねえちゃんち？」と聞いたり、「おねえちゃん、クレヨン買ったん？」と聞いたりするなど、Th個人のことを知りたがった。遊びは、「看護婦」や「キキとララ」をThと一緒に描く、まりつきを交互にする、電話ごっこをするなど、相互的な遊びが多かった。Mが「看護婦さん、おねえちゃん」と言ったことから、MはThと看護婦を同一視しており、また看護婦はMの「そうなりたい大人の自己」の部分を、キキとララは「幼児的な自己」の部分を象徴しているように思えた。大人びてきた反面、「もっと遊ぶ」とだだをこねたり、ほ乳瓶を吸う姿を母親に見せに行くようなこともあった。第7期と同じように不機嫌そうに泥をこねたり手を強迫的に洗うこともあった。

【第10期（#83～90；*4年6～9月；6才〔小1〕）：幼児性からの脱却への動き】

<遊戯療法> 遊戯室入室時に「入れんの！」と自分に言い聞かせて一旦入室を拒否することが3度あった。〔母親Thとの情報交換の不足のため、この行動が母親の妊娠に伴い子ども部屋で就寝させられ始めたことの影響であることを、Thはこの時点では気づかなかった。後になって、Mのなかで「遊戯室＝もう幼児ではないから来てはいけない所」という認知が行われたのではないかと分かった。〕Thとの関係では、第9期と同じように体をすり寄せてくるが多かった。Thに絵を描くよう要求することはなくなり、Mが自分から絵を描いて見せたり、小学校での学習の成果を黒板に書いて賞賛を求めたり、学校行事や級友のことを話してくれたりした。母親の妊娠の影響か、「お姉ちゃんのおなかに赤ちゃんおるん？」と聞いたり、母親カンガルー人形のおなかに赤ちゃんカンガルー人形を出し入れする遊びをした。Thは、妹が生まれてもMは家族の一員であることを伝えようと、子どもカンガルーの人形をそばにおいて「お姉さんカンガルーよ」と言い添えた。そうするとMも3匹を並べて「お母さん、赤ちゃん、お姉さん」と言った。<母親面接（第9・10期）>

〔就学まで〕親や教師と短い会話ができる。絵を描きながら「帽子をかぶって、なわとびしとるんよ」などと説

明もできる。濁音などを除いてひらがなの読み書きができるようになった。妹との争いは相変わらずだが、自分のものを使わせてやることもある。一人で寝られるようになった。

[就学以降] 小学校には喜んで行くが、何か言いたそうに担任にまとわりつくこともある。難しいひらがなも書けるようになった。算数は理解が遅い。Thは「遅れるのが当然。Mのペースで進んだ方がよい。母親が神経質になると、かえって劣等感を与える」と助言した。一桁の足し算・引き算は分かり始めた。5月初めに母親の妊娠が分かった。Mは胎児に関心を示し、「Mちゃんのおなかにも赤ちゃんおるんよ」と言い、夜は人形を抱いて寝た。MもYも再び夜尿が始まった。母親は、出産時の分離に備えて、MとYを子ども部屋に寝かせたり、親戚に泊まりに行かせたりした。

【第11期（#91～95；*4年9月～*5年1月；6～7才【小1】）：別れへの序章】

<遊戯療法> 病院のミスで母親の出産予定日が1ヶ月ずれており、#91に突然面接が中断となる。Mは「いやだ。来週も来る」と言って、泥をこねる遊びに終始した。親がMの状態を心配し、月に1～2回父親が連れて来談するようにした。遊びは家や人形を使った遊びが主で、赤ちゃんの部屋とお姉さんの部屋を作り、赤ちゃんの部屋には乳母車を、お姉さんの部屋には、迷った末勉強道具を置く。そして、級友と思われる人形を、名前を呼びながら置く。Mの世界が家庭の外に広がりつつあることが感じられた。その一方、ぶつぶつ言いながら泥をかきまぜたりすることもあった。そんなときThは「怒ってるんじゃねえ。つらいことがあったんかねえ」とか「おねえちゃんにならんといけん言われたの」などと、Mの心中を言語化しようと努めた。そうすると遊びの内容が変わることも多かった。Mの処遇目標が一応達成されたので、約半年後を目処に遊戯療法の終結を決めた。#93に初めて終結の説明をしたが、Mは「いやだ」と受け入れがたい様子であった。

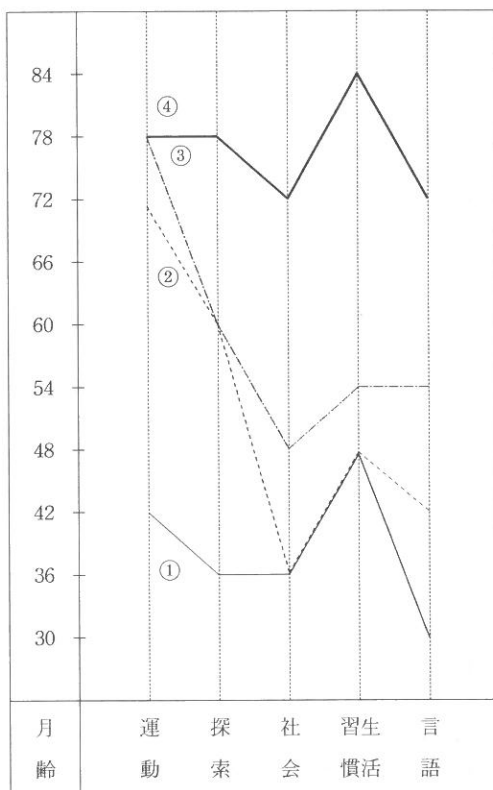
【第12期（#96～99；*5年1・2月；7才）：別れ】

<遊戯療法> #96にThから「ずっと一緒に遊んで楽しかった。だけど、遊ぶのはあと4回で終わりよ」と告げたが、Mは答えなかった。しかし、#97では自ら「あと何回？」と聞いてきた。#98では、これまでを振り返るかのようになり、今までにした遊びを次々に行った。最終回には、お別れにウサギのぬいぐるみをThからプレゼントした。Mはこのぬいぐるみを抱いて遊び、自ら「今日で終わりよ」と口にした。Thは「これまで楽しく遊んだね。これからはもう遊べないけど、私は今まで通り

Mちゃんのことが好きよ」と告げる。MはThの発言をさえぎろうとするが、Thが話し続けると、「うん」とうなずく。退室時にMが「また来週ね」と言うので、Thが「もう終わりなんよ」と言うと、Mは「さようなら」と言い直して去って行った。

<母親面接（第11・12期・その後1年間）> [4回行ったMの発達検査の結果を図6に示す。5才終わりから6才にかけての発達は著しいが、6才11ヶ月時点で1才の遅れがある。津守式検査の内容を考慮に入ると、実際には1才以上の遅れであろう。]*4年11月に第3子（女児）が誕生した。Mはとくに退行することもなくこの時期を乗り越えたようであった。遊戯療法終了後も約1年間、1ヶ月に1回のペースで母親面接を続けた。遊戯療法終了後1年間のMの様子：親への反抗が盛んであった。知的な遅れのことを他児から言われることがあった

図6 面接期間中のMの発達の变化
(津守式発達検査による)



- ① 生活年齢4才7ヶ月時
- ② 生活年齢5才5ヶ月時
- ③ 生活年齢5才9ヶ月時
- ④ 生活年齢6才11ヶ月時

が、それで自己評価がひどく傷ついているようではなかった。近所の子とはよく遊び、ドッジボールの活動にも参加していた。夜尿は治まっていなかった。知的な面は他児よりはかなり遅れていたが、2桁の足し算・引き算、かけ算などもできるようになった。言語の方では、漢字や語句はよく覚えるが、文章構成力が劣っていた。小2から近所の塾に通い始めた。学校では、担任や他児の援助・干渉を嫌がる傾向があり、課題を拒否するような行動も見られた。母親の問題としては、次のような問題を話し合った。①子どものべったりつきまどってくるような依存が受け入れられない。②子どもの行動に反応・干渉し過ぎ、子どももそれに応酬するので、親が振り回される。

4. 考 察

(1) Mの障害発生の背景

Mの障害が始まったのは、親と視線を合わせなくなり発語も減少していった生後8ヶ月以降のことであろう。この時期は、愛着の発達の流れのなかでは、母親が乳児から特別の存在として認識され、安心感を保証する安全基地になっていく時期である。Mahler (1975)⁹⁾の分離・個体化理論では、分化期に相当し、母親と自己、母親と母親でない人の分化が生じる。Mahler理論を対象関係論的に再構成したKernberg (1976)¹⁰⁾によれば、共生期には自他融合的な表象において「良い」経験の表象と「悪い」経験の表象が分化し、分化期にはこのそれぞれの表象において「自己」と「他者」が分化してくるという。自我や対象関係の健康な発達のためには、乳児の心のなかで、欲求を満たし安心感を与えてくれる「良い母親」の表象と、母親から愛し大切にされる「良い自己」の表象が育ち、「悪い母親・自己」の表象よりも優位を占めることが必要であろう。良い自己・他者の表象を核にして対象恒常性(注2) object constancy が成立すると考えられるからである。

この時期のMの母子関係を分析してみると、Mの母親は、転居の疲れ、兄夫婦への気兼ね、妊娠による自己の身体への気遣いなどのために、それまでのような全面的関心をMに向けられなくなっていたと思われる。また、Mの行動を制限しコントロールしがちであった。生後7～9ヶ月には、他者の意図、関心、感情などに対する認識が生まれる(Stern, 1985)⁷⁾。Mは、母親の自分に対する関心が減少し変容してしまったのを感じたであろう。この変化は親にとってはやむをえないことであるが、Mにはそのような事情を読みとる力はない。Freud, A. (1965)⁸⁾は、親の抑うつ状態や弟妹の誕生といったや

むをえない事態でも、対象恒常性が成立していない段階の子どもには拒否や放棄として経験されると言う。Mも母親の変化を自分への拒否のように受け取ったのかもしれない。このようにして、Mの悪い他者・自己表象を強化するような経験が重なり、良い自己と他者の表象は喪失の危機にさらされたと思われる。それは、安心感や幸福感の喪失、対象への怒りや不安を生み出す。乳児の原初的な自我にはこのような感情を処理する力はない。乳児の未熟な自我にできるのは、苦痛な外界との情緒的接触を絶ち、外界からの取り入れを拒否することによって、良い他者と自己の表象を守ることであろう。Mの自閉的傾向はこのようにして出現したのだと考えられる。しかも、このような状態のままでも母親が躰を開始し、体罰を用いた。Mの母親への怒りはさらに強まっていったであろう。Mの排泄の障害や夜尿は、母親への怒りや攻撃性の存在を暗示している。たとえ母子がこのような状況であっても、母親以外の人物が母親の不備を補えたなら、状況は好転したかもしれない。しかし、父親はMとの間に恒常的な関わりのパターンを作れないでいたようであるし、新しい事業で忙しくMに関わる余裕がなかったであろう。転居によって祖父母の援助も得られなくなっていた。

(2) Mの言動の発達の意味

家族の変化、また遊戯療法が与える保護的環境が、押しつぶされかけたMの自己と他者の良い表象を回復させていったと思われる。第2期にMが母親人形を持ってうずくまり「オカアサン」と言ったことは、Thとの転移関係のなかで、自閉的防衛が崩れ、満たされなさや寂しさを抱えたMの自己が顔をのぞかせ、(良い)母親への希求が表現されたことを示している。これとともに家庭では母親への愛着が復活してきた。Mの自閉は、一種の防衛として内的世界の核にある良い表象を守っていたのであろう。Mの内的世界に「育む母と育まれる自己」という良い表象の核が生き残っていなければ、愛着の回復は困難だったであろう。第3期に繰り返されたミルク飲み人形への授乳の遊びは、Mが復活してきた良い表象を膨らませ満喫しようとした遊びと思われる。

しかし、これで問題が片づいたのではない。Mの心のなかには、母親から拒否されたと感じたことによる怒りが解消されずに残っていたからである。次の段階(第4期)では、いよいよ母親に対するアンビヴァレンスが出現することになる。第5期から第6期のMは、母親への怒りやアンビヴァレンスを統合しようとしていたようである。第6期にMが恐れた動物は、Mの母親に対する怒りや攻撃性が投影されており、この感情を統合する作業

を安心できる遊戯室と面接者との関係のなかで行おうとしたのであろう。攻撃性は次第に明確な方向性をもって転移的にThに向けられてくる。これは、Thが攻撃によって壊れることのない対象として受け取られていることをも示している。第6期のMは、家庭では母親を避ける時があり、父親に接近し女の子らしい行動を示している。MahlerやAbelin(1971,1975)^{9),10)}は、幼児の心のなかで母親像が分離をめぐる葛藤とアンビヴァレンスの対象になる時期には、父親像が個体化の支えになり、母親へのアンビヴァレンスの解消を助けると指摘する。Mも父親と異性愛的色彩の関わりをもつことによって母親から距離を取ろうとしていたのかもしれない。しかし、母親を回避する一方、母親に絵本を読んでもらいながら就寝し、夜中に目覚めても「カアサン、バイバイ」と言いながら眠れるようになったことは、良い母親表象が内面化され、安心感の基盤として機能し始めたことを示している。

ただ、この時期は丁度幼稚園への転園と重なり、母親がいらだち不安になった時期である。当然母親のMへの発達期待や「良い子であってほしい期待」が高まる。第7期のMの不安定さと強迫性は、こうした状況に反応した結果であろう。この時期にMがThを「オカアサン」と読んだのは、唯一の安心できる対象であるThが、退行的に良い母親像と同一視されたためかもしれない。

第8期になると、Mも母親も安定したため、MがThと母親を同一視することはなくなったと思われる。むしろ、発達した自我の力に支えられて、Thを独立した対象として認識し関心を持ち始めていることがうかがえる。第9期になると、Mは長幼や性別についての自覚が増し、Thを年長の同性として意識し、理想化しながら同一視の対象にしているように思える。Mが第7期に熱中した「あられちゃん」は、Thと自己の現実的および理想的イメージが融合した対象のように見える。これに対して第9期の「看護婦」人形は、Mの理想イメージの一つなのであろうが、Mの現実イメージとは区別され、Thと等価であると位置づけられている。その一方、第9期にMがほ乳瓶を吸う姿を母親に見せたりしているのは、幼児的・退行的な面を見てほしい気持ちも強かったからであろう。ただ、この気持ちを率直に表現できるようになったのは、自我の健康さの現れかもしれない。

第9期の終わりに判明した母親の妊娠は、Mに発達課題をさらに意識させたようである。第10期に遊戯室への入室を躊躇した行動は、母親の発達期待を取り入れた結果、「遊戯室＝幼児的」という認知がなされ、遊戯室に入りたい気持ちと入りたくない気持ちの葛藤が生じたか

らかもしれない。あるいは、幼児性を拒否する母親に対して「攻撃者との同一視」(Freud, A., 1936)¹¹⁾のような機制が働き、Thとの関係でM自身が攻撃者(母親)を演じようとしたのかもしれない。また、Mが「自分のおなかのなかにも赤ちゃんがいる」と言うようになったのは、空想のなかで母親に同一視することによって新たな喪失に対処しようとしていたのであろう。面接場面での他の遊びにも「お姉さんにならなければ」というMの気持ちが感じられる。しかし、Mの強迫的な遊びや不機嫌は、発達期待を受け入れていくことに伴うしんどさ、怒り、退行したい気持ちをも示しており、治まることを知らない夜尿もこうした気持ちに関連しているのであろう。乳児期・幼児期早期にMほどの外傷を受けた場合、怒りやアンビヴァレンスが根強く残存し続けるのかもしれない。

(3) 心理療法における注意点

Mの母親は、Mが親を拒否するので、Mから反応を引きだそうとして干渉的になり、かえってMの拒否を招いていた。McCall(1979)¹²⁾は、愛着の過程を歪める親子関係の例として、Stern(1977)¹³⁾の言う「侵入的な親」を挙げている。このタイプの親の関わり方は一方的で、子どもが相互交渉で役割を果たす機会を奪ってしまう。この態度は、子どもからすれば応答的なものではなく、むしろ自己を混乱させる過剰的なのものに映るであろう。このような親に対しては、「子どもに主導権を発揮する機会を与え、親は子どもの動きに合わせて動くように」助言することが必要である。

また、Mの母親は、Mに早い自立と発達を期待する傾向が強く、とくにMの発達が進み始めてからそれが著しくなった。発達に伴う喪失や退行したい気持ちに対する感受性は乏しかった。同様に、Mの母親はべったりとした子どもの依存を受け入れるのが不得手な性格であった。これらは、母親自身が依存欲求や退行したい欲求を抑圧しがちであることと関連しているであろう。この問題を本格的に取り扱うためには母親自身の親子関係にまで深く立ち入らなくてはならないが、それは時間の点でも母親の現段階での資質を考へても難しく思われた。そのため母親面接では教育的アプローチをとり、Thが上記のような点を母親に話して聞かせる形の介入に終わった。母親がこの点をどれだけ実感的に洞察できたかは疑問である。ただ、どのようなアプローチを取るにせよ、この点を母親に自覚させることは必要と思われる。幼児期は絶え間ない喪失の繰り返しである。分離・個体化によって母親との融合的關係を失ない、言語によるコミュニケーションなしには思いを共有できない世界に投げ込まれる。

躰の開始によってすべてを周囲に代行してもらえた時代は終わる。やがて、親を同胞と共有している事実やエディプスの世代間境界の事実にも気づかされる。もちろん、喪失は同時に新たな能力や世界の獲得でもあり、そこには喜びと誇りも生まれる。発達は喪失と悲しみだけなのではない。しかし、獲得の裏には喪失があり、子どものなかでは、前進したい気持ちと拮抗して退行したい気持ちも存在するのだということは知っておく必要がある。

Mの遊戯療法の初期の目標は、良い自己・他者表象と愛着の回復であったが、中・後期では、Mの自立と依存の葛藤に共感し、Mの退行したい気持ちをも大切にすることを目標にしていた。遊戯療法は、Mが母親の発達期待を取り入れて自己の幼児的部分を乗り越えようとするときに、むしろそのしんどさや限られた退行を受容する役割を果たしたと思う。

最後に強調したいのは、母子並行面接形式の発達臨床では、子ども面接者と母親面接者が情報交換を十分に行

い、両者の情報を総合して、子どもの言動の発達の意味を正しく把握しておくことが重要だということである。Mの処遇の場合、一部の時期を除いてこの情報交換は十分に行われたと思う。

(注1) ここでは、表象 representation と心像 image をほぼ同義に用いるが、心像という用語の方が、想起された、より具体的な姿を指している。

(注2) この概念は、Hartmann が Piagetの理論に示唆を得て導入し、Freud, A., Fraiberg, Mahlerなどがこの概念について論究している。Solnit(1982)¹⁴⁾は、「子どもが、一次的愛情対象である親の記憶や親との情緒的絆を保持し、親が欲求不満や失意の原因であったり不在であったりする時にも自分を育み導いてくれる存在だと感じることができるような対象関係の状態」と定義している。

文 献

- 1) 黒丸正四郎：自閉症の原因と診断。上出弘之・山口薫 編，講座発達障害Ⅰ，原因と診断，日本文科科学社，(1983)。
- 2) 品川浩三：自閉症，福村出版，(1983)。
- 3) 森省二：自閉症児の問題行動。山中康裕 編著，問題行動，日本文科科学社，(1983)。
- 4) Winnicott, D. W. : Playing and Reality, Tavistock Publications, (1971). 橋本雅雄 訳，遊ぶことと現実，岩崎学術出版社，(1979)。
- 5) Mahler, M. S., Pine, F., and Bergman, A. : The Psychological Birth of the Human Infant, New York: Basic Books. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 訳，乳幼児の心理的誕生，黎明書房，(1981)。
- 6) Kernberg, O. : Object Relations Theory and Clinical Psychoanalysis, New York: Jason Aronson, (1976)。
- 7) Stern, D. : The Interpersonal World of the Infant, Basic Books, (1985). 小此木啓吾他訳，乳児の対人世界，岩崎学術出版社，(1989)。
- 8) Freud, A. : Normality and Pathology in Childhood, New York: International Universities Press, (1965). 黒丸正四郎・中野良平 訳，児童期の正常と異常，岩崎学術出版社，(1981)。
- 9) Abelin, E. L. : The Role of the Father in Separation-Individuation Process. McDevitt, J. B. & Settlege, C. F. (eds), Separation-Individuation, New York: International Universities Press, 229-252, (1971)。
- 10) Abelin, E. L. : Some Further Observation and Comments on the Earliest Role of the Father. *International Journal of Psycho-Analysis*, 56, 293-302, (1975)。
- 11) Freud, A. : The Ego and the Mechanisms of Defense, New York: International Universities Press, (1966), First Published in 1936. 黒丸正四郎・中野良平 訳，自我と防衛機制，岩崎学術出版社，(1982)。
- 12) McCall, R. B. : Infants, Cambridge: Harvard University Press, (1979). 二木武 監訳，0・1・2歳児，医歯薬出版，(1981)。
- 13) Stern, D. : The First Relationship: Infant and Mother, Cambridge: Harvard University Press, (1977). 岡村佳子 訳，母子関係の出発，サイエンス社，(1984)。
- 14) Solnit, A. : Developmental Perspective on Self and Object Constancy, *The Psychoanalytic Study of the Child*, 37, 201-218, New York: International Universities Press, (1982)。

ABSTRACT

The Recovery Process and Psychotherapy of a Developmentally Disordered Infant

Yuichiro KAMIJI and Masami KUMAGAI

The purpose of this paper is to examine the psychotherapeutic process of a developmentally disordered female infant from a psychoanalytic perspective.

The infant's disorder (autistic rejection of her mother and developmental arrests) started at her age of eight months. It was caused by the mother's exhaustion and transient indifference to the infant which had followed her family's moving and her pregnancy. The mother felt rejected and managed to get reactions from her infant. This made the infant more autistic. We advised the mother to restrain intrusive attitudes. In treatment of the infant, our initial task was to give her security and to restore her representation of good mother and self. The infant soon revived some attachment toward her mother. But it was accompanied by intense ambivalence. Our next task was resolution of her ambivalence toward mother. In the later phases of treatment, when the infant tided over several developmental crises, our basic stance was to be empathic with her distress, rage, and regressive needs.

Key Words : developmental disorder, infant, attachment, ambivalence, regressive need

平成3年8月16日受付

平成3年8月26日受理